

サイナツア口の村役場 1952年 アルバー・アアルト



気候風土と場所に根差す建築空間

第二次大戦後、日本が初めて参加した五輪は1952年のヘルシンキ大会であった。その年、フィンランドの中部にある湖の島、サイナツア口に村役場が完成した。

設計者のアルバー・アアルトは戦前の'30年代、CIAMに参加し、パイミオのサナトリウムやビープリの図書館などの優れた建築を完成させていた。戦後の復興期に入ると、コンペで次々と実施権を得る。村役場はその一つである。

戦前の建築は陸屋根で外装は主に白色、当時の国際的なモードに沿うが、戦後は勾配屋根を自由に掛け、煉瓦や木材など身近な材料を自在に使うようになる。

南側への緩斜面の針葉樹林の中に敷地はある。都市は遠く、村役場は生活必要施設を含む。全体は南に開くコの字型の棟とそれを閉じて中庭を形成する1棟からなる。コの字型の南隅の3階に議場を載せるが、他は地上2階建てだ。

主階は土で埋めた中庭を囲む2階である。東と北側が役場、西側は1、2階とも職員住宅で、南側に閉じるように図書館が置かれている。西側以外の1階には当初、薬局、書店他5店舗、銀行、理容店、ボイラー室などが入っていた。

図書館棟はコの字の棟と少し離して置かれ、その空き部分に階段を設けている。東側はアプローチ階段で、上ると右手が役場と議場、左手に図書館の入り口がある。玄関ホールに入ると左手に廊下がのびて役場の諸室へ導き、右側の階段を上り、踊り場で左折し数段上ると議場入口に、さらに進むと傍聴席レベルに着く。左巻きの螺旋状動線だ。

議場の天井は高く、屋根勾配に沿って傾斜し、煉瓦壁に渡された立体トラス状の2本の合成梁が屋根を支える。採光は主に北壁面中央の木製ルバー付き大窓による。

階段を上って中庭へ、または広く高い空間に出会うと一瞬、解放感による喜びを感じる。この単純なシークエンスを、アアルトは後に「ラウタ・タロ」など、度々用いる。

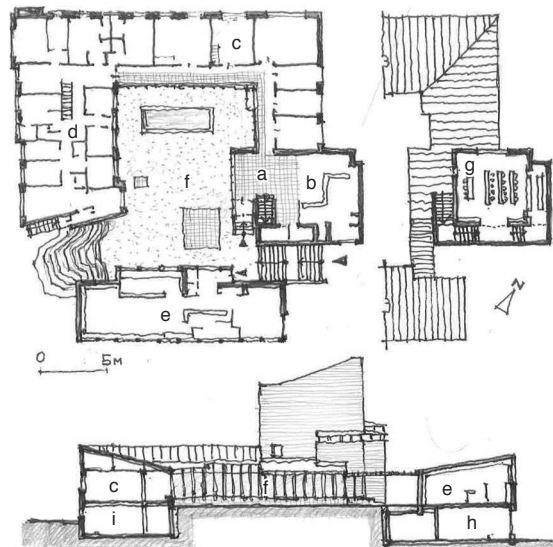
腰を高くして書架を置き、その上に高い採光窓を設けた図書館の設えも以後定番となる。

この建築の特徴は村人の必要生活施設を集約し、特異にも中庭に土を埋め、主階を2階にしたことである。

これは、この地方の寒気厳しい長い冬への対応であろう。暖房用配管を最短で回し、1階店舗の背後壁は土に接して寒気を防ぎ、中庭側に下る片流れ屋根は軒高低く、庭の植栽に日当たりよくする。廊下の暖房放熱器を包む低い窓台に観葉植物を並べ、上部は天井までの2重ガラス入りの木製サッシを巡らす。廊下はサンルームになる。

ミースが均質空間を求め、コルビュジェが理念にもとづく計画に打ち込んでいた時、アアルトは村人の生活利便性を重んじ、気候風土に根差す建築を追究していたのである。

南東からの外観 左の棟が図書館 階段を挟んで右側が役場と議場



左上 2階平面図 右上 3階平面図 下 断面図
a玄関ホール b案内室 c役場諸室 d職員住居 e図書館 g議場
f中庭 h店舗 i文書庫



左上 役場の廊下 右上 図書館(木村)
左下 議場への階段 右下 議場(木村) 注なき写真は大橋撮影